

か行とが行の重量感を具体的な物質としてイメージする時に傾向はみられるか:言語の重量感のイメージ

信田和穂

はじめに

清音と濁音のオノマトペで重量感に違いが見られる[1.]ように、清音と濁音が与える印象というのは異なる[2]。そこで今回はか行とが行の重量感を具体的な物質で考える。これによってか行とが行の重量感が何の物質のイメージ生じているかを明らかにすることで、ネーミングの応用に生かせるようにする。この実験では、か行とが行の重量感は具体的な物質として考えたときに、そのイメージに傾向はあるか検証する。

方法

Google フォームを使いオンラインアンケートを実施した。質問内容は以下のとおりである。「か行(か、き、く、け、こ)は密度で考えるとどれぐらいの密度があると思いますか。」「が行(が、ぎ、ぐ、げ、ご)は密度で考えるとどれぐらいの密度があると思いますか。」これらの質問では1g/cm³未満、1g/cm³台、2g/cm³台から、9g/cm³台、10g/cm³以上の中から選んでもらった。またそれぞれの質問に対してその次に「上の質問を答える時に何の物質を意識しましたか」と尋ねた。そして得られた回答を元に回答をカテゴリーごとに分けた。仮説は,か行の場合木に関する回答が大半になり、が行の場合は岩石に関する回答が大半になると考えた。

結果

合計20人の回答が得られた。表1の密度の平均値は階級値と度数を利用して求めた。物質の回答はカテゴリー分けをして右の表2のようにまとめた。複数回答している場合は(1/有効な回答数)の重み付けを行った。なお一部不適切な回答があったので表3に記す。

結論： か行とが行の重量感を具体的物質として考えた時に、そのイメージに傾向はある

表1 か行とが行の密度の表

回答	階級値	か行の回答数	が行の回答数
1g/cm ³ 未満	0.5	5	0
1g/cm ³ 台	1.5	4	1
2g/cm ³ 台	2.5	6	5
3g/cm ³ 台	3.5	3	2
4g/cm ³ 台	4.5	1	1
5g/cm ³ 台	5.5	1	3
6g/cm ³ 台	6.5	0	1
7g/cm ³ 台	7.5	0	3
8g/cm ³ 台	8.5	0	3
9g/cm ³ 台	9.5	0	1
10g/cm ³ 以上		0	0
密度の平均値		2.2	5.3

表2 答えてもらった物質をカテゴリー分けした表

	カテゴリー	回答者数	回答
か行の	木材	5	木材、木片、角材、スノキでできた立方体
	アルミニウム	2	アルミニウム(2)
	プラスチック	2	プラスチック(2)
	水・氷	2	氷、水(2)
	石・岩石	2	軽石、石
	その他	3	貝殻、ガラス、気体、
が行	木材	1.5	木(0.5)、木材
	金属	6.5	金属(0.5)、合金、タングステン、鉄(2)、軽金属、銅
	水・氷	3	水、青氷
	石・岩石	5	瓦礫、岩石、石、煉瓦、岩

表3 不適切な回答

不適切な回答	
か行	蚊、火、「物質でなくて、発音の響き カン！みたいなのは密度の低い軽い音なので」、カレールー、
が行	重機、剛体(攻撃的な)、「物質でなくて、言葉の響き ゴン！みたいなのは密度の高い重たい響きなので」、「なんか強そうなのでか行よりは重いかなあという感覚」

考察

この結果からリサーチクエスションの内容はまた回答してもらった密度の結果は、先行研究では、「が」の方が「か」よりも重量感があり、が行の方がか行よりも重量感があるという今回の実験結果[3]と一致した。物質について見ていくと、か行では木材系が、が行では金属系と石・岩石系が多く、傾向はみられると言える。今回の調査で生じた問題の一つは回答方法の指定である。「上の質問を答える時に何の物質を意識しましたか」という質問で答えてもらったが、表3に見られるように抽象的すぎたり、そもそも物質でなかったりする回答が複数見られた。そのため回答欄を作るときに具体例を示したりすることが必要である。また被験者がアンケート直前に考えていたことが回答に影響を与えかねないという注意点がある。

おわりに

言葉の重量感を考える時にどのような物質をイメージしたかには一定の傾向が見られた。ただし思い浮かべる言葉というのは条件によって変わりうるものなので今後検証が必要である。

文献

[1]佐藤 広英ほか (2009)「潜在連合テストによるオノマトペの印象評価——SD法との比較——」,『心理学研究』80(2),pp.145-151,公益社団法人 日本心理学会.
[2]芳賀 純(1977)「意味微分法による清音と濁音の比較(Ⅱ) - 「ハ」「パ」「バ」について - 」,『文芸言語研究・言語篇』1,pp.65-82,筑波大学大学院人文社会.
[3]芳賀 純(1976)「意味微分法による清音と濁音の比較」,『関西心理学会大会発表論文集』88,関西心理学会. (芳賀 純(1977)「意味微分法による清音と濁音の比較(Ⅱ) - 「ハ」「パ」「バ」について - 」,『文芸言語研究・言語篇』1,pp.65-82,筑波大学大学院人文社会.69ページより引用)